

## 《巻頭言》

# 明治150年を迎えるに当たって



理事・拓殖大学海外事情研究所准教授 丹羽文生

来年、平成30(2018)年は、明治元(1868)年から起算して満150年に当たる。地方自治体、民間団体も含め、国を挙げて「明治150年」に向けた関連事業推進の機運が高まりつつある。

江戸末期の1853年7月、アメリカからの黒船来航により、泰平の眠りを貪っていた日本は開国を迫られ、日米和親条約、次いで日米修好通商条約、更には蘭、露、英、仏との間でも関税自主権の欠如、治外法権の承認という屈辱的な不平等条約を結ばされた。これ対し、薩長を中心にして攘夷論が沸き起こるが、長州藩は米、仏、蘭、英4カ国連合艦隊に敗退、薩摩藩も薩英戦争で敗北すると、瞬く間に開国論へと舵を切り、倒幕運動を経て、大政奉還から江戸城無血開城、近代化への歩みをスタートさせる。

当時の国際社会は弱肉強食の原理が支配し、アジアの国々は西欧列強の餌食にされていった。しかし、日本は富国強兵、殖産興業をスローガンに、西欧列強と肩を並べる大国になるべく突き進んでいった。

近代日本における最初の本格的な対外戦争は日清戦争である。日清戦争は一言で言えば、日本と清国との朝鮮半島の奪い合いである。清国は勿論、ロシアにとっても日本への勢力伸長を図る際、朝鮮半島を通過せずして、それはできない。

従って、日本は清国と朝鮮との従属関係を断ち切る必要があった。当時、「眠れる獅子」と呼ばれていた清国だったが、日本は見事に打ち勝ち、日清講和条約を

結ぶ。だが、これによって清国から割譲を受けた遼東半島は、仏、独、露の三国干渉により清国への返上を余儀なくされる。「三国」と言っても、事実上はロシアの横槍であった。

この暴挙に、国全体にロシアに対する反抗心「臥薪嘗胆」の炎が燃え上がり、国民一丸となって国力増強に励み、「一等国」へと押し上がっていく。遂には日英同盟を結ぶに至り、雌雄を決する宿敵たるロシアを日露戦争で撃ち破った。幕末に結んだ不平等条約の改正も明治全期間を要して実現に至る。

これらが達成できた理由とは何か。当時のリーダーたちが優れていたことは論を俟たない。それ以上に、何より国民の間に存在した「自らが国を背負っている」という気迫、独立自尊の心意気があったからではないか。作家の司馬遼太郎のいう「坂の上の雲」は正に挙国一致で、先の見えぬ急坂を必死に攀じ登ろうとしたのである。国家と国民が苦楽を共有した時代が明治であった。

明治をテーマに扱った書籍を読むと、今日の日本が置かれた国際環境は当時と酷似しているという印象を受ける。ところが、当時と決定的に違うのは、国家と国民の間が断絶されてしまっているということである。国家と国民の一体感を、どう醸成していくか。明治150年に当たって考えてみる必要があるのではないだろうか。